



for Refugees

Japan Association for Refugees

難民支援協会 (JAR) ニュースレター Vol.20 Mar 2020

Contents

- 自立の道のりに寄り添う～来日直後から就労支援まで
- この冬の支援／冬の支援の現場から
- 約10年にわたり支援してきた無国籍の方が勝訴！
ほか

COVER STORY

自立の道のりに寄り添う ～来日直後から就労支援まで



来日直後の方へのカウンセリングの様子。(※文中の人物とは関係ありません)

頼るあてもなく日本に逃れた難民の方が、経済的に自立するために職を探し、働き続けることは簡単ではありません。就労が認められてもなかなか就職先が見つからなかったり、困難な状況で身心を患い、就労自体が難しいケースもあります。JARでは、来日当初から一人ひとりへのカウンセリングを行い、厳しい生活を支えながら、就労が可能になる見込みのある方を対象に就労支援を行っています。3か月間の「就労準備日本語プログラム」を受講して働くための日本語を学んでもらい、ご本人と相談しながら就職先を選定、職場となる企業と連携して円滑な就労が可能となるよう数年にわたってサポートし続ける、息の長い支援です。昨年度は54人の就職を実現しました。

JARの支援を受け、アルバイトを掛け持ちして働きながら日本語やITの勉強を続け、念願だったIT業界への就職を実現した方がいる。2015年来日したアフリカ出身のアチュさん(仮名)だ。就労準備日本語プログラムを熱心に受講した後、アチュさんは就労支援担当スタッフ・寺畑との面談で自らの展望をこう語った。「今お金を稼げるかどうかだけでなく、長期的なプランを考えたい。アルバイトをしながら勉強を続け、スキルを得て安定した仕事に就きたい。」多くの難民の方の就労を支援し同様の希望を聞いてきた寺畑は、「それは並大抵の努力ではできない」と厳しい現実を伝えた。その一方で、希望を叶えられるよう就職活動の支援を開始。難民の方の雇用を考える企業を集めたジョブフェアなどで条件に合う職場を探し、同時に無料で日本語やプログラミングの勉強ができる場にも通えるよう支援した。アチュさんは弁護士を紹介などJARの支援を受けて難民申請を続けながら、飲食店などで日中アルバイトをし、夜は日本語学校などに通う日々を2年以上続けた。そして来日から3年後、

ついに希望していた企業への就職を実現した。就職先では実力を認められ、もし難民認定が得られなくても何とか在留を続ける道がないかと熱望されているという。

強い意志で夢を実現したアチュさんだが、振り返れば、来日当初の日々は辛く過酷なものだった。初めてJARを来訪した時は所持金がつきそうになり、ホームレスの状態だったと、支援事業部マネージャーの新島は語る。JARのシェルターに入り、その後は幸い政府の生活支援金も受給できたが、一時期は体調を崩しJARスタッフが付き添って病院で治療を受けた。その時期を支援事業部のスタッフが支え続けていたからこそ、その後の就労支援を始めることができたのだ。

日本に逃れた難民の方が経済的に自立するには、来日直後の時期をしっかりと支え、本人の希望や意志を尊重しながら、その方が持つ力を引き出し、寄り添い続ける息の長い支援が必要だ。JARはこれからも、各部署の連携を通じて、一人ひとりの道のりに寄り添い続けていく。

この冬の支援（期間：2019年12月1日～2020年2月29日）

冷え込みの厳しくなった昨年11月末から「越冬支援」を始めました。迫害から逃れ、誰一人知らない日本にたどり着いた方々が日本で迎える初めての冬を無事に越すには、JARの緊急支援が欠かせません。

暖冬とは言われていましたが、新たにJARを訪れる難民の方はアフリカ出身が多く、本格的な寒さは経験がありません。ある男性は、来日後2か月近く都内の路上をさまよった後、凍えたような姿でJARにたどり着き、スタッフがあたたかい食事と共に冬物の衣類などを提供し、難民申請者のための公的支援の情報を丁寧に説明すると、目を潤ませて感謝を示されていました。事務所来訪者数は2月末までの1日あたり平均約20人になりました。

ホームレス状態に陥った方には一時的に泊まれるシェルターを提供し、満室時も女性・子どもなど脆弱性が特に高い場合には宿泊費を支給、事務所ではあたたかい食事や防寒着などを提供し、専門性を持つスタッフによるカウンセリング、関係機関への紹介などを行いました。（事務所や収容所等での相談件数：621件、電話での相談件数243件）

支援の呼びかけに対し、たいへん多くの方からご協力いただき、2019年11月末から2020年2月までの約3か月間で、のべ968名の個人・団体の方から、1,700万円以上のご寄付を頂戴しました。古本でのご寄付なども合わせると、目標としていた総額1,800万円以上となります。また、冬物衣類をはじめ、多くの物資支援も集まり活動に役立てることができました。皆様からのご支援で、難民の方への緊急支援を継続できましたことに、心より感謝申し上げます。



【この冬の支援実績】

- ・事務所や収容所等での相談件数621件
- ・電話での相談件数243件
- ・シェルター提供人数31人

【いただいたご支援*】

- ・ご寄付の総額：17,627,822円(968件) ※下記を除く
- ・古本でのご寄付(パリュブックス)：1,103,721円(625件)
- ・古物買取でのご寄付(お宝エイド)：95,915円(9件)

*冬の寄付の案内開始(2019年11月18日)から2020年2月29日まで

冬の支援の現場から

ホームレス状態が続き、毎日朝からJAR事務所に来ていたアフリカ出身のジョセフさん(仮名)。難民申請者を対象にした公的支援にも申請していましたが、審査のための面談に2か月近く待たなければなりません。JARの事務所で食事と仮眠をとり、時折涙しながら耐えていましたが、ようやくシェルターに入れることが決まると、満面の笑顔を見せてくれました。

「JARのスタッフやインターンが笑顔で話しかけてくれたことに救われた」と話すジョセフさん。シェルターに入居してからは交流の場を広げ、日本語も勉強し始めています。

同じ時期にシェルターに入居した2人組の男性は、入居が決まるとすぐに転居先を探すので支援してほしいとスタッフに申し出てきました。「自分たちが少しでも早く出ること、待っている

人がシェルターに入れるようにしたいから」という言葉に、支援を行うスタッフも強く勇気づけられました。

【写真左下】年末には街が華やぐ中、難民の方々にも心身ともに少しでもあたたかく、楽しい時間を過ごしてもらいたいと、ボランティアの方にもご協力いただき、手作りの野菜スープやサンドウィッチなどを振る舞いました。たくさんの方が食事を楽しみに来てくださり、連日の寒さで体調がすぐれない方も多く、くもりがちな表情が少しだけやわらいだのを感じました。

【写真中央】難民の方に渡す食料のパッケージを準備する様子。食料の多くは提携するフードバンクやベーカリーからボランティアの方に運搬していただいたものです。



【写真右】クリスマスや新年を迎えることを感謝するお手紙も、難民の方から届きました。

約10年にわたり支援してきた無国籍の方が勝訴！

旧ソ連出身・無国籍の方を難民と認めず強制送還を命じた国の処分の是非が争われた控訴審で、東京高裁は2020年1月29日、処分を違法と認めて取り消す判決を下しました。裁判長は彼が難民に当たると指摘し、「地球上で行き場を失うのは明らかだ」と国の判断を批判しました。

判決の前日、JAR事務所を訪れ「悪い結果が出ることしか考えられない、敗訴だったらその後はどうしようか、その場で捕まってしまうのだろうか…」と不安を吐露していました。判決が言い渡されると、ともに闘ってきた弁護士たちが歓喜の涙を流す中、ご本人は顔を上気させて喜びをかみしめていました。

事務所では、裁判の傍聴に行けなかったスタッフやインターンが、固唾をのんで判決の結果を待っており、勝訴の報せが入ると拍手がわき起こりました。写真は支援事業部スタッフの田多が、ご本人から電話で報告を受ける様子です。その後、判決は確定し、難民認定を受けることができました。これから生活の基盤を作っていく必要があります、喜ぶばかりではられません。日本で希望を持って生活できるよう、JARは引き続き支えていきます。



写真展『ニッポン複雑紀行』を開催しました



JARが運営するウェブマガジン『ニッポン複雑紀行』が3年目を迎えるにあたり、新宿のアイテムフォトギャラリーシリウスにて写真展を開催しました（2020年1月30日～2月5日）。新聞、ラジオなどで取り上げていただき、SNSで口コミも広がり、毎日来場者数が増加。最終日には開場前に並んでお待ちくださる方々がいらしたほどで、短期間にも関わらず約1,500名にお越しいただきました。

ニッポン複雑紀行は、難民も移民もそうでない人も、誰もがともに暮らせる社会を目指して、「ニッポンは複雑だ。複雑でいいし、複雑なほうがもったいい。」をコンセプトに運営してきました。群馬県大泉町のブラジル人学校、ベトナム

難民の定住から始まった静岡県浜松市のコミュニティ、日本とそれ以外のルーツをもつ様々な「ハーフ」の人々の姿など、これまで撮影してきた写真を一人ひとりの方から聞かせていただいた言葉の数々と合わせて展示しました。

来場者からは「この国にたしかに暮らしている人たちの面影が展示を観終わった後も残ります」、「1つ1つの写真、テーマをかみしめるように味わうことができました」という声が寄せられ、展示を何周も見て回られる方、涙を流して思いを伝えてくれる方もいらっしゃり、写真展という空間にウェブとはまた違う意義を感じました。

「チャンピオン・オブ・チェンジ」 日本大賞に入賞

第3回「チャンピオン・オブ・チェンジ」日本大賞に、代表の石川えりが入賞しました。本賞は社会問題に対して自ら行動し、地道に活動を続けることで地域社会の課題解決に貢献している女性を対象としたものです。

「そんなことできっこないよ」と言われながらも、日本にいる難民の方々の苦渋を傍観するにたえず、同じ人間として支援したいという一心で団体を立ち上げ、20周年を迎えた節目にこのような賞をいただき、大変光栄です。残念ながら難民を取り巻く状況は改善したとは言えませんが、絶望的な状況のなかでも、歩みを止めない。それがJARの続けてきたことです。今回の入賞は今後の変革への期待も込めていただいたものと受け止めています。難民となって日本へ逃れてきた方々が、日本で守られ、自身の将来を描ける。そんな未来に向かって、これからもぶれずに活動をしていきます。

ローマ教皇が日本での難民受け入れを訴え

2019年11月にローマ教皇フランシスコが来日しました。日本にいる難民を含む青年に対して講話を提供し、「友情を広げ、日本へ逃れてきた人たちをより受け入れることをお願いしたい」と日本での難民受け入れを訴えました。

ローマ教皇は就任以来、一貫して戦争や迫害、災害、貧困から逃れてきた多くの移住者と難民の悲惨な状況に心を痛めていると述べ、移住者と難民の権利と尊厳を在留資格に関係なく守ること、彼らと共生することを様々な場面で訴えてきました。

しかし日本では、難民認定が非常に厳しく、生活保障もわずかで、また難民申請者を含む在留資格のない外国人の収容にも課題があります。日本社会の中で権利と尊厳を守られているとは言い難い現状において、ローマ教皇の今回の発言を真摯に受け止め、難民・移民の方々に対するより寛容な政策の実現が望まれます。

日本に逃れてきた難民とつくったレシピ本 「海を渡った故郷の味 Flavours Without Borders」新装版を発売中！



難民の方からレシピを教えてください、ともに料理を作りながら制作したこのレシピ本は、2013年の出版以来多くの方に読んでいただき、難民への共感を広げるきっかけになってきました。より多くの方に日本にいる難民について知ってもらいたいと、レシピの内容はそのままに、このたび新装版を出版しました。ミャンマー（ビルマ）、イラン、クルド、エチオピアなど、世界15の国・地域から45の家庭料理を集めています。本書を通して、海を渡って逃れてきた難民の故郷の味と、その思いを感じていただければ幸いです。

『海を渡った故郷の味 新装版 Flavours Without Borders new edition』
認定NPO法人 難民支援協会 編著、株式会社トゥーヴァージンズ 発行／価格：1,600円＋税
www.flavours-without-borders.jp



スタッフ紹介 | JAR STAFF

難民支援協会では現在約30名のスタッフが、日々事務所に訪れる難民の方々を支えています。
難民問題に関心を持つきっかけはそれぞれ。支援に携わるスタッフを不定期でご紹介します！

寺畑 文絵 定住支援部

難民に関心をもったのは、大学時代にソーシャルワークの勉強をしていた際、The Middle of Everywhereという本を読んだことがきっかけです。当たり前のように国を行き来できる私と、命を犯してまで難民になる人、その違いを見つめた時に当事者意識が芽生えました。

2015年にJARに入職してからは、難民の就労前教育の運営や就労に向けたカウンセリングなどの就労支援を担当しています。仕事をするとすることは、ただお金を得るだけでなく、社会とのつながりを持つということです。来日して間もない時期は知り合いがおらず、暗かった表情が、働き始めると見違えるように明るくなるんです。職場で仲間たちに囲まれて仕事をしている姿を見ると、この人の居場所がここにあるんだな、ということ強く実感できて、やっつけて良かったと感じます。しかし就労支援では、ご本人のやる気やスキルがあっても、在留資格の問題で本人たちの希望する道に進むことが難しいのも現実です。歯痒い思いをすることも多いですが、ここでの生活をその人の人生の中で意味のある時間にして欲しいと思い、支援を続けています。



★好きな言葉：Celebrate who you are

『新型コロナウイルスに関して』

JARでは、新型コロナウイルスに関して感染拡大を防止するため、支援している難民の方々に必要な情報を発信するとともに、スタッフにリモートワークを導入するなどの対応をとっています。できる限り難民の方々への支援を維持するように工夫を進めていますが、支援者の方々への対応を含め、業務に影響が出る可能性があります。詳しくは、ウェブサイトをご覧ください。

毎月のご支援が難民の命と未来を支えます

難民スペシャルサポーター募集中

1,500円あれば、



難民申請手続きのための
交通費を支払えます

3,000円あれば、



路上生活に耐えている難民が
宿で一泊休むことができます

5,000円あれば、



成田空港に向き、とどめ
置かれた難民に面会できます

ご支援はこちら

www.refugee.or.jp/kifu

Tel: 03-5379-6001 (広報部まで)

※ご寄付は、税控除の対象となります。